まえがき

筑波研究学園都市を語る時、その概成に力を尽くした竹内藤男知事、山口武平県議、梶山静六代議士の三人の政治家を挙げざるを得ない。

三人の共通項は敗戦である。

一九四三（昭和一八）年、ブーゲンビル島沖海戦の敗戦を受け、竹内藤男陸軍主計中尉はニューブリテン島に閉じ込められ、今村均司令官の指示を受けてイモ作りに青春の情熱を捧げた。

ブーゲンビル島沖海戦の敗戦によって撤退したラバウル航空隊の副司令・小園安名中佐が厚木航空隊司令としてB－29の首都爆撃を迎え撃つが、その小園司令の下で戦闘機の整備に従事していたのが海軍整備少尉であった山口武平氏であった。

また本土決戦に備えて、遠く満洲の空で飛行機の操縦訓練に腕を磨いていたのが梶山静六陸士五九期生であった。

竹内藤男は県知事として五選を果たしたものの、最後は収賄罪の疑いで逮捕されている。

山口武平は県議を九期務め、自民党県連のドンといわれた茨城県政会の重鎮であった。県議会議長、自民党県連幹事長を務めている。

梶山静六は茨城県会議員を四期務め、国政へ進出した後、田中派重鎮から竹下派の立ち上げに参画し、国家公安委員長、官房長官など政府の中枢に位置した。

筑波研究学園都市の概成に尽力した竹内藤男知事、山口武平県議、梶山静六代議士の心を繋いだ赤い糸は、ブーゲンビル島沖海戦の敗戦であり、その戦いで戦死した横田三郎海軍中尉であろう。

横田三郎海軍中尉の実兄は、研究学園都市の中核に位置する谷田部町の横田栄一町長である。谷田部町は、研究学園都市建設にあたっての土地の買収では反対運動が燃え上がった。しかし横田町長にとって弟の戦死は「科学の戦いで負けた結果」だと受け止めていたから、井上春成（工業技術庁初代長官）の「次の戦争に備える」ための研究学園都市概成に尽力したのではないか。

目次

まえがき　3

1　つくば地域政治の流れ　9
2　研究学園都市案内　13
3　筑波郡大地主・江戸英雄　19
4　歴代市長の失政　24
5　大山詣り　30
6　茨城県政界のドン・山口武平　35
7　自民党総裁選石破候補圧勝の意味とは　60
8　横田三郎海軍中尉はブーゲンビル島沖海戦で散る　62
9　竹内藤男　67
10　相棒　79
11　北関東型支配　85

12 平穏と庸才そして谷田部三派 91
13 谷田部三派とは？ 99
14 目に一丁字なき奴ら 102
15 領袖 106
16 竹内藤男知事は次の戦争を考えた？ 109
17 戦いは怨念を生む 116
18 つくばエクスプレス 123
19 B29迎撃機＝月光 126
20 「竹内を恨む」 131
21 学研労協の登場 138
22 科学万博開催の背景 144
23 谷田部城下 149
24 大地主支配の終焉 156
25 竹内藤男の使命感 160
26 事務局長の躊躇い 170

27　怪奇現象　175
28　グレーターつくば構想　179
29　公共工事発注　182
30　捨て石　188
あとがき　194
谷田部町抗争史年表　196
引用文献　198

1　つくば地域政治の流れ

日本一無名な茨城県

二〇一七（平成二九）年、橋本県政は否定された。六期（一九九三年～二〇一七年）続けるなかで茨城県のイメージは、今や日本で一番無名な県になってしまった。

今回の県知事選挙は、梶山自民党県連と公明党の連合軍対「橋本知事・市町村会」の戦いであった。橋本知事を推薦しなかった自民党県連は五期、六期目と二回も敗れてしまったが、ようやく雪辱を果たした。

つくば市政は朝鮮半島情勢へ直結してきていると言えば驚くことだろう。そのことについて追い追い述べていく。谷田部町渡辺安重氏は県会議員を三期務め、筑波科学万博（一九八五年開催）を沼尻民平谷田部町町長と共に誘致した功労者であるが、一番の功績は理化学研究所のＰ４施設の誘致に成功したことである。Ｐ４施設は危険性を帯びた細菌を扱う施設だというこ

とで風評被害も重なり反発が強まった。風評被害とは地価の暴落である。地元の強い反対を押さえ、誘致した功績は大きい。

だが、理化学研究所は世間の耳目を浴びず、じっとしておいて貰いたかったことだろう。というのも、オウム真理教が使用した生物兵器の元菌は理科学研究所から出ているからだ。世界の生物兵器関連書には、つくばの理化学研究所施設から北朝鮮へ「売られた」のではないかという疑念が書かれている。在韓米軍が理化学研究所の売却した細菌を防疫する訓練を行っているのに対して北朝鮮は、あらぬ疑いをかけた演習だと『労働新聞』紙上などで抗議している。

政争激しいつくば市

南牛（筆者）はつくば市民を二〇年以上前に辞めている。つくば市は、住むものにとって、本当に複雑な町であった。つくば市は一九八七（昭和六二）年三か町一村の合併で生まれた市（後に筑波町と茎崎町を編入）である。合併前は中心部を谷田部町と桜村が構成していた。桜村は「村にデパートができた、村が東京のデパートを誘致した」と自慢していた。過疎化の逆転の象徴だったが、市政が施行されてからのつくば市の政争が激しく、市長が五人も変わる。

つくば市の初代市長を務めた倉田弘氏は、最後の桜村長を務め、谷田部町、大穂町、豊里町、

桜村の合併でつくば市が誕生すると市長に就任（一九八八年～一九九一年）し、八七歳で亡くなられた。上海の同文書院に学んだ方だった。就任時に筑波町が合併した。

二代目の市長は、谷田部町長を務めた木村操氏。一九九一年～九六年まで。二期目に逮捕される。

三代目は、桜村から県議を務めていた藤沢順一氏が就き、一九九六年～二〇〇四年まで二期務めた。就任時に茎崎町が合併した。

四代目は、旧大穂町の市原健一氏が二〇〇四年～二〇一六年まで三期就いたが、運動公園建設の住民投票に敗れた。

つくば市域は全国でも珍しい政争の激しい地域である。五代目の現市長五十嵐立青氏は、親が筑波移転後に誕生したいわゆる「新住民」である。旧住民が藤沢派や四代目市長派へ分裂し、その一方と旧住民の谷田部町内の反木村派や日共（日本共産党）、生活クラブ（ネット）などが手を握って誕生させている。

南牛が谷田部町松代五丁目に越したのは、一九七九（昭和五四）年の一二月だった。それから四〇年経て、四〇八号線を北へ向かっていると昔のことが走馬灯のように浮かんだ。四〇八号線は刈間、土浦学園線につき当たって右折、「山水」を通過すると「平城園」という店があ

った。松代居住は一九九五（平成七）年までだったが、当時の都心には見かけなかったビルが林立していた。藤沢勘兵衛氏ご自慢の西武デパートはもう撤退したようだった。

松代居住時代は、西武の前の喫茶店へ自転車で通ったものだ。喫茶店で、後に三代目市長となる藤沢勘兵衛氏の長男順一氏に会ったものだ。順一氏は市長選挙に再三敗れ、今は自宅でバラ作りの一方、地元病院の理事長や土地改良区の理事長を務めている。県議選の時は藤沢勘兵衛氏に頼まれて、かなり応援した。南牛が松代在住中は一度として負けていない。

2　研究学園都市案内

つくば市域の実力者

谷田部町役場に勤務していた横田彭哉氏は、谷田部町が「筑波研究学園都市」の誘致に賭けた目的は、谷田部町という自治体を発展させるための「相乗効果」にあったという。自立力を確立し（産業育成力・雇用力・税収力・教育基盤力・福祉力）、生活水準の向上を図り「定住力」「呼び込む魅力」をつけるためであり、医学部が設置された「筑波大学」は、医療過疎の当地にとって最も求められ、「研究学園地域と谷田部町の調和ある発展」が町政の指針（衛星都市構想）であった、と。

今の言葉で、「持続可能な地域の創成」である。

先日ＮＨＫテレビで、つくば生活では大きな住宅空間が獲得でき、東京へ通勤できるのはつくばエクスプレスの存在が大きい、と報じていた。研究学園都市を建設するとき、建設を立案

計画した人達は交通不便を強めたと言われる。というのも、折角建てた公務員住宅へ住まずに東京から研究所へ通勤されては困る、と考えたからだ。

更に公務員住宅も、a、b、c、dの四階級の階級差を設けており、その上のe型住宅には、e1、e2、e3の三種があった。筑波大学ではe3からe2へ引っ越しするというと祝福されたという噂があった。b型は単身住宅で、林立する単身住宅は壮観であった。多摩ニュータウンに住宅を構え、筑波では単身住宅に住むのが研究者の夢、と言われたのは三〇年前であった。今、つくば市域の公務員住宅は壊されつつある。公務員住宅を張り巡らせた研究学園都市は、「満洲国の夢の残骸」のようでもあった。

つくば市の初代市長は倉田弘氏。二代目が木村操氏で、退職後、不慮の死を遂げた。但し、自身の活動を記した自伝まがいの本を書いている。三代目は藤沢順一氏で、大地主の出である。父親が立派過ぎだった。しかし、県議選に出た時の筑波大生買収事件が後を引いた。四代目は名前を出しづらい方だ。ハワイ旅行をスキャンダラスに『週刊新潮』に書かれた。

つくば市の歴代市長のなかで「庸才だ」と指摘されるのが、三代目の藤沢順一氏である。藤沢氏の場合、尊父の勘兵衛翁が余りにも偉大であったが故に、事あるごとに「親父に比べれば」とか、「親の七光りだろう」と言われた。本人はきわめて不満であったろう。外郭団体の

部下の一〇〇億円詐欺事件や、「回らない風車」（後に詳述）を元自民党職員出身の助役に作らせたことなどで評判を落としてしまった。その後、四代目市長となる県議の挑戦に敗れ、その再選に挑むも敗れ、次に元厚生省の官僚を市長選に担いだが負けている。藤沢順一氏の人格を疑う市民は少ないが、側近の陣容が悪いと市民から見られている。

つくば市域都心の空洞化

藤沢市長の失策がある程度容認されたのは、部下のしくじりだと分かっているからだ。今でいう任命責任だが、そこが「庸才だ」とみなされる。

藤沢市長は戦前から大地主階級に所属していた。大地主階級とは、東北六県、そして新潟・茨城の両県しか存在していなかった水田五〇町歩以上の地主を規定する言葉で、戦後社会では地方政治から農地解放と重なって後退している。県議が対抗馬として市長選へ挑み、藤沢三代目市長を下し、四代目となる。この四代目を再選で辞めさせれば良かったのに、つくば市民は三選させる。三選されるとワンマンになる。自分の経営する病院の側の土地をかなり割高な値段で四五ヘクタールも市に購入させ、運動公園の建設を図ろうとする。市の公社は銀行からの借金で購入する。それが多くの市民の反感を買い、市民投票で運動公園は否決され、四選は断

念する。

つくば市長として夢を語る著作を藤沢市長は出している。しかし、夢を語られているように市民には受け取られなくなった。つくばエクスプレスが開通した結果、ストロー効果で、終端駅にあった西武デパートの撤退となった。西武デパートは、旧桜村にデパートを誘致した藤沢勘兵衛村長の功績の一つであったのだ。

藤沢市長が書いた『生まれ変わる地方政治』という本を読んで、つくば市を「民主主義の先進都市」とする努力が問われるだろうと思った。

政治は結果責任である。結果として、村が市へ「発展」すると尊父の努力の成果であった桜村のデパート誘致の成果が潰え、筑波研究学園都市の「都心」が空洞化したのである。つくばエクスプレスができて、村のデパートより銀座のデパートへ行くようになってしまった。デパート撤退の後の政治は、旧態以前へ逆戻りをしてしまった。『生まれ変わる地方政治』の中の一句一句が響く。

西大通りを北上し、学園中央自動車学校を目指していたはずの南牛は道に迷ってしまった。刈間の自動車学校は知っていた。八〇年代はこの付近を軽自動車でよく徘徊したものだ。成島

†著者
安部　桂司（あべ・けいじ）
福岡県生まれ。工学院大学に学ぶ。通産省東京工業試験所、同・化学技術研究所を経て、物質工学工業技術研究所主任研究官、化学技術戦略推進機構研究開発部つくば管理事務所所長を歴任。化学専攻、朝鮮・満洲の鉱工業史の研究に従事。この間在職中の、東京工業試験所 80 年史の編纂委員を務める。単著に『研究学園都市の概成』（STEP、1995 年）、共著に『北朝鮮の軍事工業化』（知泉書館、2003 年）、『戦後日朝関係の研究』（同、2008 年）。公害対策技術、北朝鮮科学技術にかんする論稿多数。現職・東アジア貿易研究会研究顧問。

「次の戦争」に備える　筑波研究学園都市概成史

2019 年 6 月 15 日　初版第 1 刷印刷
2019 年 6 月 25 日　初版第 1 刷発行

著　者　安部　桂司
発行者　森下　紀夫
発行所　論創社
東京都千代田区神田神保町 2-23　北井ビル
tel. 03（3264）5254　fax. 03（3264）5232
web. http://www.ronso.co.jp/
振替口座　00160-1-155266
装幀・組版／フレックスアート
印刷・製本／中央精版印刷
ISBN978-4-8460-1831-3　©2019　Printed in Japan